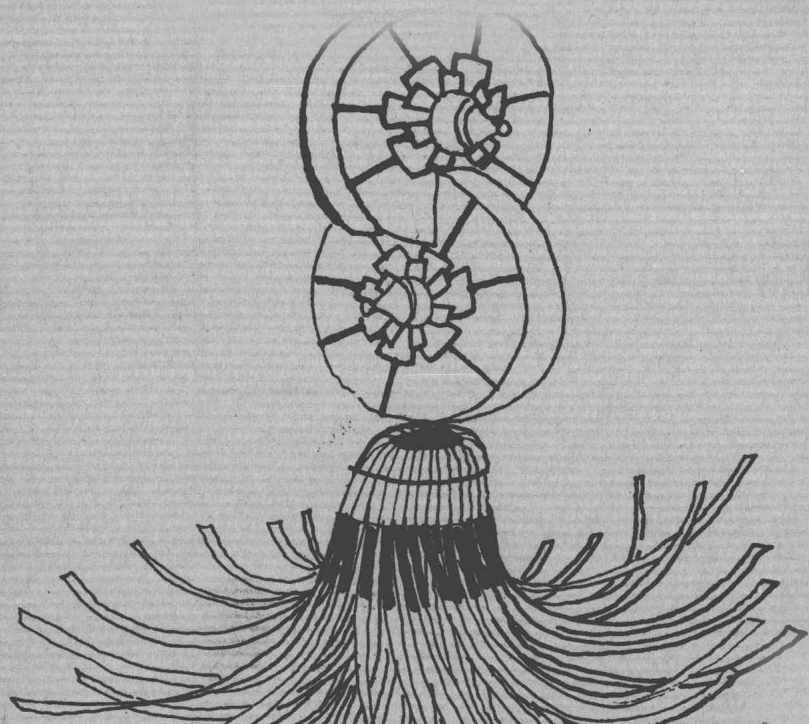


野狐笛 村上元三

野狐笛 村上元三



野
狐
笛

三〇〇円



昭和三十五年五月十日印刷
昭和三十五年五月十五日発行

著者 村上元三

発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社
東京都渋谷区代々木上原町一三三八
振替口座番号・東京二一七五七

野
狐
笛

目次

伊勢参り	五
一両大名	六
夢の小判	七
鳥羽の浦風	完
蛇に似た眼	吾
通り魔	六
町火消とガエン	三

鳶口

三八

菓子折二十両

四四

捕物双六

二五

残るひとり

二六

喧嘩と火事

二七

鼠小僧恋八景

二八

装幀
風間

完

伊勢参り

水上は神路山から出て、末は伊勢の海へそそぐ坂内川にかかった松坂の大橋の上で、その喧嘩が起つたのは、伊勢神宮へ初詣でに行く旅人たちで通行の賑わっている正月三日の朝であった。

一時は駕籠も馬もとまる、という騒ぎになったが、喧嘩をしている双方を見ると、通行の者たちも見物に加わって、笑い声を立てた。

片方は、いずれも十五歳から十七歳ぐらいまでの少年たちで、草鞋をはき、柄杓を手にしているところを見ると、土地の者ではなく、抜け参りの一団と思われる。

六人連れのその少年たちが喧嘩を売ったのは、きのうからこの松坂で興行をしている江戸の相撲、四代目の横綱稲妻雷五郎の一行のうち、明荷あけにを運ぶ途中の、いわゆる禪担ぎ五人であった。

「この橋は、天下の往還だぜ。それを手前たちみてえな大きな図体の野郎どもが、横にならんで歩くのは通行の邪魔だ、といったんだ」

柄杓を片手に、巻舌で啖呵を切っているのは、抜け参りの一団の中でも頭株であろう、まだ前髪を

残した、きりつとした顔つきの少年だが、ほかの少年たちと同様、長い旅を続けてきたと見え、裾を端折った袴も、埃と垢で汚れている。

「そうだ、そうだ。三ちゃん、しっかり掛け合え」

うしろにいた少年が、しきりにけしかけている。

三ちゃんと呼ばれた少年と向い合っている若い相撲取は、年はやはり十六か七であろう。これも薄汚れた浴衣一枚だが、背は對手よりもずっと高いし、身体つきも大きい。

「やい、なんとか吐せ。悪うございました、と頭を下げてあやまるのなら、ここは黙って通してやらあ」

喧嘩慣れているらしく、三ちゃんと呼ばれた少年は、相手のほうが力は強いなどということも気にならぬのであろう、腕を組んで橋のまん中に突っ立っている。

それと向い合った若い相撲取は、口下手らしく、顔を真っ赤にして、いきり立っているのだが、対手にしゃべりまくられ、返答が出来ずにいる。

「やいやい、なんとか言わねえか。おれあ江戸の者で、名は三次。禪担ぎめ、手前も名乗れ」
「お、おれは」

ようやく若い相撲取は、口を切って、

「横綱稻妻雷五郎の弟子で、西方二段目の八枚目につけ出されている梶之助という者だ」

「二段目なら、四股名があるだろう。それを聞こうぜ」

「四股名は、両国」

顔のまん丸い、いかにも人の良さそうな梶之助はそう名乗ってから、

「うしろに担いだ明荷の中には、親方の化粧まわしが入っている。天下の横綱の化粧まわしがお前たちに道を譲れるものか。さあ、そっちこそ悪かったと頭を下げ、橋の片端をこっそり通るがよい」

「何を言やがる。天下の横綱もへちまもあるものか。それ、叩きのめせ」

三次は、仲間へ声をかけると、いきなり両国梶之助の胸倉へ飛びつき、相手の頬を二つ三つ殴ったのが、いかにも喧嘩慣れのしている、きびきびした動きであった。

「何をさらす」

本当に腹が立ったと見え、梶之助は、太い腕で三次の左手を押えて、

「こいつら、川の中へほうり込んでしまえ」

うしろにいる相撲取仲間へ声をかけた。

「畜生」

三次は、つかまれた右手を振り放そうとしたが、二段目でも相撲取は相撲取だけに、力は強い。

梶之助は三次の右手を背中の中へ廻したまま、身動きもさせず、こんどは三次の左手もつかまえて門に締めあげた。

「さあ、何うだ」

と三次を欄干のほうへ押しつけて行く梶之助へ、三次の仲間がおどろかろうとしたが、それを梶之助の仲間の相撲取たちが、大きな手をひろげて妨げた。

喧嘩だ、という声は、橋の両袂から町の中へひろがっていった。

伊勢参宮の旅人はもちろん、土地の者たちも通行を邪魔され、はじめは面白がって見物していたのが、だんだんと腹が立ってきたのであろう。

「喧嘩なら、河原へおりてするがよい」

「橋の上をふさぐとは、人めいわくな」

大橋の両袂から、罵しり声が飛んできた。

それも耳へは入らず、三次という少年を頭株にする一団と、両国梶之助たち若い相撲取は、大橋の上で殴り合い、組みつき、派手な喧嘩を続けていた。

「正月そうそう人さわがせな」

町会所の役人たちが、屠蘇機嫌の顔を寒風にさらしながら、六尺棒を抱えて走ってきた。

この松坂は、むかし蒲生氏郷の城のあったところだが、文政のこのころは、紀伊徳川家の領地となり、紀伊家の家老がここを治めている。

三井八郎右衛門も、松坂の出身であり、松坂木綿の産地としても聞えているが、城下には古い商家がならんでいた。

江戸はもちろん、京大坂から伊勢参宮をする人々は、必らずこの松坂を通るので、大きな旅籠もあって、大橋の下流には大口という港を控え、南伊勢では一ばん賑わっている土地であった。

「おっ、仲人が入ったようだな」

橋袂まで行ってから、町役人は足をとめた。

津のほうから大橋へかかってきた二挺の駕籠が、北袂のところにとまると、中から旅姿の、品のいい五十歳前後の商人風の男がおりた。その駕籠について歩いていた、これも旅姿の、革羽織を着た男が、二人の喧嘩のあいだへ入って行くのが見えたからであった。

「待った、待った」

革羽織の男は、三十二三の面長の、眉の濃い顔で、言葉つきは江戸っ子らしい。

「双方とも手を引いてくれ」

喧嘩の仲裁は慣れているとみえ、その男は、両国梶之助から三次を引きはがすようにして、てきばきと動き、両方のあいだへ割って入った。

「なんだ、手前は」

と三次は、梶之助に絞られた両腕がしびれているので、さかんに両手を振り廻しながら、

「仲裁など無用のことだ。そっちこそ手を引きやがれ」

「こいつは威勢のいい小僧だ」

「何をっ」

「おれあ江戸一番組、に組の火消で初五郎という者だ。往来の人が足をとめられ、迷惑をしていなさる。ここは一つ器用に、喧嘩をおれに預けてくれめえか」

「いやでいっ」

欄干を背に、三次は、腕まくりをしながら、

「この禪担ぎを叩つくじくまでは、喧嘩はやめねえ」

「それじゃあ、土地のお役人衆に引き渡してやろうか。年の始めから、もつそう飯を食うのもいいだろう」

に、組の初五郎は、三次や梶之助たちを、子供扱いにしている。

「な、なんだと」

三次も、橋の袂まで走ってきた町役人たちの姿を眼にして、

「おいらたちも、抜け参りをしてお伊勢様へ初詣でをする途中だ。縁起の悪いことはご免蒙らあ」
「それなら、おれに任せるか」

初五郎に突っ込まれて、三次は、困ったように仲間の少年たちを見廻した。

「どうする」

「仲人に預けようぜ」

仲間も、これ以上に喧嘩をしては不為、と思ったのであろう、三次のそばに集ってきて、

「に組の頭なら、おいらも顔は知っている。ここは預けたほうがいいぜ、三ちゃん」

「三ちゃんとやら」

に組の初五郎は、笑いながら、

「預けてくれたら、悪いようにはしねえ」

「扱いようによつては、手を引いてやらあ」

ふてくされて、三次は答えた。

「どうだね。そちらの力士衆は」

初五郎に訊かれて、両国梶之助は、

「明荷さえ通してもらえば、おれのほうは何んでもない。喧嘩を仕かけたのは、そっちだからね」

「よし、双方ともきれいに喧嘩は預けてくれ」

といつてから、に組の初五郎は、駕籠から出てきた商人風の男のそばにいて、

「旦那」

小腰を屈めながら、

「双方に一両ずつ渡してやつちゃあ下さいませんか」

そういわれて相手は、さつきから三次という少年の顔を見ていたが、

「頭」

「へい」

「三ちゃんと呼ばれたあの子の顔、見おぼえがないかえ」

「どこかで見たことがあるような気が致しますが」

「米沢町のわたしの店へ、以前よく出入りしていた大工の宗七の子ではないか、と思うのだが」

「なるほど、思い出しました」

に、組の初五郎は、膝を叩いた。

「宗七の死んだちと、大工の仕事場へ行つて木っ端を買い、売り歩いている姿を見たことがございます」

「なんで抜け参りに出たのだえ」

ようやく喧嘩のかたがつき、松坂の城下を出外れ、参宮道を山田のほうへ向いながら、に、組の初五郎は、三次に訊いた。

「江戸にいても、ろくなことはねえから、仲間を十人ほど集めて江戸を出たんだ」

二挺の駕籠のうしろを、初五郎と一緒に歩きながら、三次は不服そうに、

「ところが、途中で一人減り二人逃げして、半分になってしまったんだ」

「だが、抜け参りでもお伊勢様を拝みに行こう、と思いついたのは殊勝だな」

「そうじゃあねえ。隣町の連中と喧嘩をやらかして、相手に怪我をさせたので、江戸にいられなくなつたからよ」

「一人前のことを言やがる」

と笑いながら初五郎は、

「お前たちに一両渡して喧嘩を納めて下すつた、あの駕籠の中の旦那はどなたか、知っているだろうか」

「米沢町の呉服問屋、秋田屋作兵衛さんだろう。おれの親父が生きてるころ、出入りをしていたの
で、おれも、旦那や内儀さんから菓子を買ったことがある」

「このごろ、木っ端売りはやってねえのか」

「あんな詰らねえことは、もうやめた」

「年中ごろごろ遊びまわって、お袋を泣かせているのだろう」

「ふん、余計なお世話でえ」

母親のことを言われると、やはり三次も眼を落して、歩きながら小石を蹴った。

江戸両国米沢町の呉服問屋秋田屋作兵衛は、ことし十五になる娘のおきぬを連れ、に組の頭の初五郎を誘って、師走の支払いなどは、女房のお常や長男の作太郎、番頭たちに任せ、お伊勢参りに出てきたのだった。

作兵衛の駕籠に続いて、二挺目の駕籠にはおきぬが乗っている。

江の島詣ではしたことがあるが、江戸をはなれてこんな遠くまで旅するのは、おきぬにとつてはじめての経験だけに、何を見ても面白い。松坂大橋の上で起った喧嘩も、おきぬは、駕籠の垂れの間から、そっとのぞいていたのであった。

母親似で、下ぶくれの、色の白い、眼の大きなおきぬは、米沢町小町といわれている。

兄の作太郎は、商売一方の堅い男だが、おきぬは、芸事が好きで、祭のときなど必らず踊り屋台に引っぱり出されるし、自分もそういう派手なことが嫌いではない。

さつき橋の上で、大きな相撲取たちを相手に喧嘩をしていた三次を見て、子供のころから顔は知っている相手なので、くすくすとおきぬは、駕籠の中で忍び笑いをしていた。

「お前の留守中、お袋の面倒は誰が見てくれるのだ」

に、組の初五郎に、叱りつけるように訊かれ、三次は、ちよつとひるんだ表情になったが、

「長屋の連中が、見ていてくれるだろう。お袋だって、婆というほどの年ではねえ、自分ひとりの口を凌ぐぐれえの手内職は出来るからね」